



他社が断る 仕事こそ 宝の山

多摩の企業人

『私の決断』

Vol.05

食

品や工業製品の製造年月日、製品表示、バーコード表記などさまざまな場面で使われている「シール」は、1960年初めにアメリカで「粘着紙」が開発されて以降、急速に拡大した市場だ。そうした動きに呼応し、1961年に三協で設立されたのが三協シール印刷である。食品関連のシールが業界の取扱量の半数以上を占めるなか、同社は、半世紀に渡り、印刷品質や耐久性など難しい仕様のオーダーが多い工業向けラベルを中心に業務を展開してきた。印刷技術や、製品をミクロン単位で打ち抜く技術、全ての工程をコンピューターで管理するシステム、1人の職人が一つの機械、一つ

三協シール印刷株式会社

もり や か ず き
代表取締役 **森屋一樹氏**

1967年東京都三鷹市生まれ。04年に社長就任。
「シール印刷」のノウハウをベースに
各種組立用両面テープの特殊形状加工や印刷を
組み合わせた分野で業績を伸ばす。
三鷹市と山梨県都留市に工場がある。
東京都三鷹市新川 6-31-12 Tel.0422-49-3113

1人が1台の機械を専任で
担当。そのため隅々まで磨
き上げられ、なんともきれ
いな工場だった。天井からは
静電気防止のため数分ごと
にミストが噴射される。



の仕事を最後まで担当し、自社の工場内で一つ一つの目で仕上がりを確認・検査するなど、万全の体制、独自のノウハウを蓄積してきた。
転機は2000年初め、同社の技術と仕上がりへのこだわりを見た大手系列の電子メーカーから、「シールを打抜く技術

を携帯電話の液晶バックライトに応用できないか」という相談があった。携帯電話に「iモード」が登場し、液晶ディスプレイが大型化するタイミングだった。
液晶関連事業を展開するには、これまで順調に売上げを出してきたシール印刷業務を一部整理する必要がある。しかし、精密機器に対応できる部品を作るにはクリーンルームも新設しなければならなかった。森屋一樹社長は今は亡き先代社長と協議を重ね、「自社にしかできない新しい道」を選択。シール印刷の仕事を減らし、都留工場を改装するなど、新たな方向へ経営の舵を切った。

新分野の売上が 約5割を占めるまでに成長

携帯電話の液晶バックライト内の特殊フィルムの打ち抜きにはじまり、その周辺を固定する両面テープ、防塵・防水用のテープの打ち抜き加工など、シール印刷の技術を活用し、次々と難しいオーダーにこたえていった。

例えば液晶パネルの周囲に張り巡らされる防塵パッキングは幅わずか0.6ミリ。あまりにも薄く、すぐによじれてしまったため、加工には熟練した職人の技が必要となる。同社社員は大半が中途採用だが、技術習得などの人材育成にはとりわけ力を注いでおり、こうした高度な技術や集中力が必要とされる加工にも難なく対応できている。そして今や、携帯液晶関連の取り扱いが生産ベースで約3割、売上高ベースでは約半分を占めるまでに成長した。

「他社でもできる仕事は価格勝負になり、いずれは生産が海外に移転してしまう。国内で生き残るには、高い技術と他社にはできない仕事、手間のかかるような面倒な仕事を好んで取り組むしかない」と森屋社長は語る。

最近では、技術・品質面で困難な仕事があると、商社や材料メーカーが「三協シール印刷ならできる」と紹介してくれるようになった。こうした難しい注文に対応していく中で、さらなるノウハウや技術が蓄積されていく。とことんお客様のオーダーに付き合うという姿勢が、同社の躍進を支えている。